

特別展

日本の象牙美術

明治の象牙彫刻を中心に



花鳥風俗暗絵嵌飾棚（部分） 明治時代

1996年8月13日(火) — 9月29日(日)

渋谷区立松濤美術館

東京都渋谷区松濤2-14-14 TEL. 03-3465-9421

象牙彫刻は太古より現代までの長い歴史をもっています。日本では奈良時代の正倉院御物の中の工芸品に見ることができます。木工品に象牙を細かく象嵌した木画(もくか)技法の箱や楽器など紅や紺色に染めて文様を白く彫り抜いた撥鏤(ばちる)技法の作品など世界的に最高水準の工芸品が伝わっています。室町から江戸時代にかけて、床の間の飾りの品々に象牙が使用されるようになり、特に戦国大名の高価な茶入れの蓋や茶杓(ちやく)に用いられました。江戸時代は武士や町人の間で印籠(いんろう)や根付(ねつけ)の材料としてもはやされ、更に、煙草筒(きせるづつ)や筆記具容器の矢立や女性の櫛・簪(くし・かんざし)など広範囲に使用されました。

幕末から明治にかけて、社会が変動して根付がすたれ、代わって明治10年代から象牙を丸彫りした置物彫刻が盛んに製作されました。これらの牙彫り置物彫刻は、木や漆器に貝や象牙を象嵌した芝山象嵌漆器の家具、調度品などと共に、内国観業博覧会や諸外国の万国博覧会に出品され、海外に盛んに輸出されましたが、明治後期にはそのブームも去りました。近代のモダニズム芸術の隆盛の陰に埋れた感のある象牙彫刻ですが、明治中期には、旭玉山、石川光明、島村俊明らの優れた牙彫作家が輩出して、明治期に木彫復活への契機と橋わたし役を担ったとされているにもかかわらず、未だその全体的な調査が行われていません。象牙の輸入が困難となった現在、明治・大正期の象牙彫刻をはじめとする象牙美術の意義と全体像を見直す時期に來ていると言えるでしょう。

本展は正倉院から戦前までの象牙を使用した日本の美術工芸の流れを約250点の作品で概観するものです。日本国内のコレクションで構成されますが、日本の象牙美術を通観した展覧会としては初めての大規模な展示となるでしょう。



紅牙撥鏤尺模造作品(表裏、部分) 吉田文之作
奈良時代(昭和の復元作品) 宮内庁正倉院事務所所蔵



象牙地美人初夢図蒔絵螺鈿印籠 印籠・羊遊齋作
根付・梶川作 江戸時代 印籠美術館所蔵



古代鷹狩 石川光明作 明治時代



染象牙・果菜、貝づくし置物 安藤緑山作 明治時代 三井文庫所蔵

講演会
9月1日(日) 午後2時～4時
「古代オリエントと日本の象牙美術」
福井泰民 (松濤美術館主任学芸員)

映画会
8月24日(土) 午後2時～3時 「消えた隊商の民」、 「草原の王国」
NHKシルクロード —ソグド商人を探す— —サマルカンド・プハラ—
9月7日(土) 午後2時～3時 「灼熱・黒砂漠」、 「絹と十字架」
NHKシルクロード —さいはての仏を求めて— —コーカサスを越えて—

美術相談
8月25日(日) 午後2時～4時 宮田翁輔(洋画) 戸田康一(日本画)
9月22日(日) 午後2時～4時 遠藤原三(洋画) 佐藤善勇(洋画)

- 休館日 8月19日(月)、26日(月)、9月2日(月)、8日(日)、9日(月)、17日(火)、24日(火)
- 開館時間 午前9時～午後5時(入館は4時30分まで)
- 入館料 一般200円(160)円/小・中学生100円(80)円 * ()内は20名以上の団体料金

渋谷区立松濤美術館 案内図



渋谷駅下車徒歩15分/神泉駅下車徒歩5分